狼なんて怖くない

るうあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狼なんて怖くない

【コード】

N6106S

【作者名】

るつあ

【あらすじ】

彼女は怖いもの知らず。そして突然、唐突なことを僕に言うんだ。

僕の彼女は怖いもの知らずだ。ついでに言えば怪談好きで、心霊関係の特集番組があれば録画までして、観る。一人で楽しめばいいものを、わざわざ僕に電話してきて、「ねえ、今のみたみたあ？ホンモノっばかったね。めっちゃ怖かった」と浮かれた声を聞かせてくれる。

「そういうの見てると、寄ってくるって言うよ？」

と、僕が脅してみても、彼女はケロリと笑って取り合わない。

「だってあたし、靈感ゼロで金縛りの経験もないし」

とか言いつつ、彼女は内心金縛りになんかあいたくないし、本物の霊だって見たくはないかと思っっているに違いない。

彼女は怖いもの知らずで、無謀で、ちょっと無頓着だ。

僕の部屋にのこのことあがりこんでくる。

一応、下の階には親もいるし、「受験勉強」のために来たのだから、僕としてはやましい下心なんてない。……たぶん。

同じ学校だけど、今まで同じクラスになったことはない。小学校は別だった。

その僕達がどうして接点を持って、どうして付き合うことになったのかというと、通っている塾が同じで、そこでのクラスが同じだったからだ。自然と話す機会が多くなり、なんとなく彼女って可愛くて面白い子だなあと思いついた頃に、彼女の方から「付き合い合ない？」と持ちかけられた。

「僕達、受験生なんだけどなあ……」

僕はため息をついて、彼女を見やった。

彼女は参考書の代わりに、レジャー専門雑誌を開いている。「息抜きに、どこか遊びに行こうよ」と、その「どこか」を探して、僕

にも「どこがいい？」と訊いてくる。

いやだから、……

「僕達、高校受験を控えてる身だよな？」

僕があきれ顔でそう言うと、彼女は不機嫌になり、ムツと唇を尖らせた。

「ちよつとくらい息抜きしたっていいと思わない？ 適度に息抜きした方が効率いいと思うな」

「それは同感だけど。……いいから今日はちゃんと勉強しようよ。

夏休みの課題、七月の内におよそ終わらせとこつていったの、そっちだよな？」

「夏休み始まったの、一昨日。まだ猶予あるもん」

「来週花火大会あるから、それは行こうつて約束したろ？ とりあえずはそれで息抜き」

「とりあえずつて……なんかさ、冷たくない？」

「なんだよ、もう」

今日の彼女は、やけにつっかかってくる。もともと強気で、押しがちな彼女だけど、今日はやたらとムキになっているようだ。

僕はちよつと困って、またため息をついた。

彼女は肩まである髪の毛の先を、指先でつまみ、擦り合わせている。拗ねた時や考え事してる時の、彼女の癖だ。

「遊びに行く話はまた次にして。ね、この英文さ、括弧のところに入るの何かヒント教えてよ？」

機嫌直してよと、僕は彼女の顔を覗き込む。彼女はふいつと、目を逸らした。「知らない」と怒ったように言ってから、彼女はきゅつと下唇を噛んだ。

僕は心底困ってしまった。

勉強が中断してしまったことよりも、彼女の機嫌を損ねてしまったことに僕は焦り、どうしたものかと我ながら情けないほどに、周章した。

僕は、いつだって彼女に振り回されている。「付き合わない？」

と、彼女に告られる前から、彼女の一挙一動は僕の心を波立たせていた。もちろん、穏やかに凪ぐ時もあるし、大荒れの波模様になる時もある。

僕の目は、必死になって彼女を追う。

「……あのさ」

「……あのね」

僕と彼女の、戸惑いがちな声が重なった。直後に、少し驚いたような困ったような目も。

僕は「何？」と問い返す。彼女は顎をひき、息をつめた。それから「あのね」と繰り返し、僕を見据えて、言ったのだ。

「あのね、……キスって、したことある？」

「……は？」

あまりに突飛過ぎて、僕は間の抜けた声を返してしまった。けれど彼女の顔は真剣そのものだ。僕をじっと見つめて、同じことをもう一度念を押すような口ぶりで言った。

「だから！ キスってしたことあるのかって訊いてるの」

「……いきなり、なに？」

「いきなりでもなんでもいいのっ」

彼女の声が苛立ちと、おそらくは緊張で、少し震え上擦っていた。「うちのネコとなら、何度か。あと、隣のチワワにも迫られたことが……」

「そうじゃなくて！」

彼女は机に手をつくすと、僕に顔をぐつと近付けてくる。

「人間の女の子と！」

「……ないよ」

僕は小声で答えた。彼女は相変わらず顔を離してくれない。息がかかるほど、近い。視線はつい、彼女の唇に流れてしまう。

「じゃ、しよっ」

「……」

彼女は本当に、本当に怖いもの知らずだ。

…
だけど本当の本当は、違う。彼女は怖いもの知らずで、だけど…

僕は彼女の手を握った。そして、言葉で答える代りに、行動で示した。

一度目は、軽く触れるだけ。それから次は角度を変えて、押しつけるようにして長く、キスをした。

「……っ」

彼女は驚きのあまり、目を見開いている。

けど、戸惑いながらも目を細め、きゅっつと眉をしかめて、瞼を閉じた。

「……あのさ」

唇を離しても、僕は彼女の手は握ったまま放さない。彼女は案の定耳まで真っ赤にして、黙り込んでいる。

自分の方から誘っておいて、僕よりも照れるなんて。

僕は忍び笑って言葉の先を続けた。

「僕だつて一応男だし。好きな子と遊びにも行きたいし、キスだってしたいよ？」

「……う、うん」

「それと、そんな風に可愛い顔されると、ちょっと困るな。このまま狼になって、君のこと食べちゃうかもよ？」

余裕ぶって僕が言っていると、彼女も恥ずかしがりながらも、いつもの強気を取り戻したようだ。

「狼なんて怖くないんだから！ 簡単に食べられたりしませんよーだ！」

彼女は悪戯っぽく舌を出して笑い、そしてちゅつと啄ばむようなキスを僕にし返してきた。

怖くないなんて言いながら、彼女は、本当はちょっとだけ臆病だ。

強気でごまかして、拗ねたふりをする。

そんな彼女が可愛くて堪らないと思っっている僕は、今のところ狂暴な狼にはなれそうもない。

もちろん狼的な下心はいつだって抱えてるんだけど。

そのことを、ちゃんと彼女に知らせてあげないといけないかな？

怖いもの知らずで無防備で、強がりで臆病な「赤ずきんちゃん」な彼女に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6106s/>

狼なんて怖くない

2011年4月28日18時40分発行